松村通信第１６０号

5 月 23 日
松村勝弘

ドラッカー

近況　近頃は、毎朝 30 分ほど歩いています。そうしないと、一日中机に向かうなど、歩くことが全くないからです。だいたい、三千歩から四千歩の間です。冬場なら、トイレのあるところを探しておいて、頻尿対策を講じています。歳をとると頻尿になってしまってます。夏場ならほぼ大丈夫ですが。

前号で書いたとおり 4 月 19 日昼の「桂米二一門会」のあと、夜は「日本酒の会同窓会」と続いた。そこではとにかく日本酒オンパレードでまさに「日本酒の会」なのであると書いた。でも下記写真をあげ損なったので、あげておく。

26 日の「都をどり」と食事会を楽しんだが、そのときの写真もアップしておきたい。27

日の「立命寄席」と打ち上げも楽しかった。5 月連休はおとなしく読書をしたが，」5 月 19 日は毎年恒例のドロップキックという居酒屋めぐりを楽しんだ。

井坂・ドラッカー　正月に読んだけれども、改めて読み直してノートをとった本に井坂康志『『ドラッカー ── 「マネジメントの父」の実像』（岩波新書、2024 年』（書籍工房早山、2007 年がある。今回はこれを書くために、読み直したり，関連文献を少し読んでみた。それでこれを中心に考えてみたい。本書目次は

第１章　破局　一九〇九 - 一九二八
第２章　抵抗　一九二九 - 一九四八
第３章　覚醒　一九四九 - 一九六八
第４章　転回　一九六九 - 一九八八
第５章　回帰　一九八九 - 二〇〇五
終章　転生　二〇〇六 -

となっていて、見られるように年代順にドラッカーの思考の展開がわかるようになっている。また、出版社のコメントによると「全体主義が台頭して破局へと向かうヨーロッパからアメリカへ渡り、産業社会と企業、そして働く自由な人間に未来への可能性を見出したドラッカー。最晩年の肉声に触れた著者が、内なる怒りと恐怖に静かに向き合う、アウトサイダーとしての実像を描き出す。明るい本を書き続けた『マネジメントの父』に、新たな光を当てる。」こうなっている。

著者、井坂康志（イサカ　ヤスシ）氏は、ものつくり大学教養教育センター教授（ドラッカー経営学研究室）であり、東洋経済新報社勤務時代の 2005 年 5 月、ピーター・ドラッカーに外国人編集者として最後となるインタビューを行い、同年、上田惇生とともにドラッカー学会を創立、現在佐藤等とともに共同代表を務めている。1972 年生まれであるから、まさに働き盛りである。また、多くの経営学者と異なり、ドラッカーの全貌を明らかにしている。

とりわけ、ドラッカーがユダヤ人の両親のもと、ウィーンに生まれたこと、中産階級の家庭で育ったことに触れ、さらに言う。「毎週月曜日にドラッカー家ではサロンが開かれた。数学、哲学、音楽、絵画、経済、政治等、多岐にわたるトピックが訪問客に合わせて議論された。叔父ハンス・ケルゼンやフリードリヒ・ハイエク、ヨーゼフ・シュンペーター、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスらも晩餐（ばんさん）に招かれた。」（6 頁）ドラッカーが文化的芸術的によい環境で育ったことが述べられている。

キルケゴール主義者ドラッカー　長じてからのドラッカーの若き日について，同書は「若きキルケゴール主義者」という項をおこして、ドラッカーがキルケゴールを学び、実存主義者となったことに言及している。さらに言う。「人間の現実が矛盾の中にあるのは、私たちが自由を求めるからである。人間が人間として生きることは、唯一の自己によってしか始まらない。実存とは絶対者である神と現世の間の要請、あるいは無限と有限との境におい

て，緊張して立つ人間の姿である。絶対に相容れない論理の間で悪戦苦闘するのでなければ、自由に生きていることにはならない。説明不能の罪の意識につきまとわれ、苦しみ悩む人間こそが生きている。」（29 頁）ドラッカーがその後の諸著書で自由についてしばしば言及していることを思い出す。ドラッカーは 1949 年、『スワニー・レヴュー』に「もう一人のキルケゴール」という論文を発表している。これは社会生態学者ドラッカーが書いた唯一の哲学論文と言えるだろう。しかし、ここでは、ドラッカーの全著作に通底している考え方が触れられていると思う。

ところが、日本の経営学者などで、ドラッカーをキルケゴールと関連づけている論者はいない。関連づけてドラッカーの一連の著書を読み直す必要があるのではないかと考えている。私にとっての今後の課題である。

アンチ全体主義　ドラッカーはナチズムから逃れるように、ロンドンへ、そしてニューヨークへと移ることになる。「その間もナチズムの正体を解明しようと彼は呻吟（しんぎん）していた。ドラッカーには出版計画があった。ロンドン、ニューヨークへの移転で改稿が繰り返され，『政治の書』として一九三三年以来温めてきた『経済人の終わり』である。」（69 頁）『経済人の終わり』は 1939 年に出版された。同書でドラッカーはナチズムの正体を読み解いた。すなわち、

「ナチス台頭の原因は、ヒトラーという悪魔的天才や，ゲッペルス等の人間心理の襞（ひだ）に入り込む宣伝活動に帰せられることがあまりにも多い。そうではなく、経済人という精神的よりどころを喪失し、空白と化した状況を埋める社会革命運動を大衆が渇望したのである。それを読み解く鍵となるのが『大衆の絶望』である。絶望した大衆に代わりを与えれば、たちまち熱狂的支持を得るのに不思議はない。虚偽や幻であったとしても、何もないよりはるかにましだからである。

むしろ絶望した大衆に、自由は重荷である。ナチスは社会秩序を強引に再編し、人々から自由を奪い、画一化した。知識人や特権階級は追放され、ユダヤ人は経済人の象徴として抹殺された。それこそが、絶望した大衆の要求するものだった。」（71 頁）

ドラッカーは 1942 年に『産業人の未来』を書いた。

「ドラッカーにとって，人間社会とは生身の現実である。普遍的、集合的ではなく、個別的、実存的である。しかし、マルクス主義やナチズムにおいて、究極的には個人などない。個人はたんなる観念に過ぎない。観念であればその暴力的な排除・否定はたやすいことであろうが、生身の現実である人間社会を蔑ろにする勢力などを受け入れられるはずがない。

しかし「「責任を担うことのないのが、新手の経済人、主体性を利益への衝動に支配された、画一的な人間『スロットマシン・マン』である。

『「スロットマシン・マン」は、産業社会の所産ではない。一八世紀合理主義から生まれた未成熟な存在であり、中には父権主義的特性が、戯画的に表現されている人間観である。［略］このような考え方によれば、人間はガムの自動販売機さながらに、金だけに反応する自動人形である』。」（91 頁）資本主義の発達とともにそのような人間が、そのような雰囲気が、まして近年の新自由主義の風潮では、ドラッカーの懸念があたっているように思える。

しかし、全体主義の暴虐を非難するだけでは、自由な社会を守り抜くことはできない。全体主義を生んだ精神的真空の内部で、『新しい人間観』を見定める試みを必須とする。そうであるならば、ナチスへの抵抗も新しい人間観との関わりで論じられなければ意味を成さない。彼が心に懸けたのは、ナチス後の新秩序の模索である。」（78 頁）その後、ドラッカーは模索を続け、諸著作をものしたのである。

「ナチズムが倒れても、自動的に自由社会が回復するわけではないから、現代に打倒する新しい人間観をラディカルに見出そうとする行動が並行的に行われなければならないが、だれも新たな人間観を説得的には語れなかった。それでも、一種の予期が彼にはあった。

ドイツにおけるプロシア軍と同様に、世の必要を満たし、社会からの負託に応えそこに関わる人々に自由と市民性を与える理念の培養器、すなわち、企業およびそこで働く人々『産業人』が、まさに『新しい秩序、新しい人間』にほかならないのではないか ── 。」（79 頁）

まさに、ドラッカーは孤軍奮闘しているかに見える。これに対して、日本の経営者はドラッカーを受け入れた。ドラッカーは日本を愛した。そして日本の美術を高く評価している。そして美術品を購入している。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。